



◆ アイヌ文化のことをもっとも話したい!
本田優子と村木美幸の二人が、その魅力を交代で
執筆するソノコ(=お便り)形式のエッセイです。
◆



今月のテーマ

サロルンチカプリムセ / ハララキ (鶴の舞)
本田優子 (札幌大学教授)



数

多くのアイヌ舞踊の中でも、私がとりわけ心惹かれるのは鶴の舞です。一般的なアイヌの民族衣装の上に袖なしの着物を羽織り、裾を持ち上げて軽く頭にかぶり、羽ばたくように上下させるの。すると本当に鶴が翼を広げて舞っているように見え、とても優雅。白老や阿寒、旭川をはじめ各地で傳承されていて、アイヌ語の呼び方も「サロ

ルンチカプリムセ(湿原に居る鳥の踊り)」「チカフウポポ(鳥の踊り)」など様々ですが、多くは親鶴がひな鶴に羽ばたきを教えながら育てている様子を表現したものとされます。

一方、私がかつて暮らしていた平取町には違うタイプの鶴の舞が二種類伝わっています。どちらもハララキと言い、一つは「湿原で遊ぶ鶴のハララキ」。六人で複雑な動きを組み合わせながら飛び跳ねる、楽しくもハードな踊りです。もう一つは踊り手全員で二羽の鶴を表す「大空を舞う鶴のハララキ」。真ん中の長い列が鶴の胴体、両脇の短い列は翼になり、みんな着物の袖口を持って羽ばたきながら隊列を崩さずに跳び進みます(うくん、なかなかうまく表現できない)。でも、人数が揃わない時は「今日は



イラスト / 莊田悠人

胴体だけで飛びまわす」と笑いをとりながら、一列だけで踊っちゃう。

さて、その踊り手さんですが、親子鶴の舞を男性が踊っているのは…少なくとも私は見たことないですね。でも江戸時代の文献には、男性一人、女性一人、娘一人で「子を養育する真似」をするという記述もあるので、

このご時世、イクメンのパパ鶴が登場するのもいいんじゃないかしら。平取のハララキの方は最近では男性が加わることもありますが、やっぱり女性の踊りというイメージが強いかな。ところが北海道の名付け親と言われる松浦武四郎さんの『蝦夷漫画』(一八五九年)には、「サルルンタフカリ」という列になった鶴の舞(平取型ですね)が描かれていて、なんと十人中八人が男性なのです。男女が混じっているとという理由から、これを一般的なリムセ(輪舞)だとする説もあるけど、同じような男女混合の鶴の舞の絵は他にもあります。

ということ、これから鶴の舞を優雅に踊る男性スターが登場しても「アイヌの伝統じゃない!」なんて言わないでね。多様性こそ文化が生きてる証。



次回のテーマは「チャシ」
村木美幸(アイヌ民族文化財団常勤理事)が担当します。



ウポイ
NATIONAL AINU MUSEUM and PARK
民族共生象徴空間

北海道白老町にOPEN



ウポイPRキャラクター
「トウレツボン」

■本田優子(ほんだゆうこ):金沢市生まれ。札幌大学教授。北大卒業後11年間平取町二風谷に住み、アイヌ語講師を務める。
■村木美幸(むらきみゆき):白老町生まれ。アイヌ民族文化財団常勤理事。先住民族アイヌの一員として文化継承活動に努める。
■莊田悠人(しょうたゆうと):平取町二風谷生まれ。漫画家兼イラストレーター。幼い頃のアイヌ文化が原風景。東京在住。

